

P-17

前置詞から見るペルシア語の他動性 ー前置詞 az に着目してー

東京外国語大学博士後期課程 永井慧 (nagai.kei.s0@tufs.ac.jp)

要旨

ペルシア語の他動性と目的語標示に関する分析では、もっぱら後置詞 *rā* が注目されてきた。一方、参与者を二つ持ち、前置詞が動作の対象を標示する動詞も少なくない。そこで、本研究では、特に動詞との共起例が多い、前置詞 *az* に着目して、この前置詞が共起する動詞はどの程度の他動性を持つのか、また、典型的な他動詞構文をなす後置詞 *rā* との交替の条件は何か、調査した。

結果として、前置詞 *az* が、主に、他動性が中間的であると言える動詞の目的語標示を行うこと、後置詞 *rā* との交替が、「部分」、「意志性」、「有生性」、動詞の出現環境などの差から説明ができることが分かった。「部分」や「意志性」などが、通言語的他動性分析の通説に当てはまる一方、「有生性」による目的語標示選択は、通説と逆行した。加えて、一つの動詞に、他動性を決定する複数の要因が含まれているとき、どれか一つが優先され、ペルシア語の場合、「部分」かどうか、が、高い優先性を持つことが明らかとなった。

1. 問題の所在

ペルシア語の他動性に関する研究は、その多くが、一般的に「定の直接目的語マーカ―」であるとされる、後置詞 *rā* の機能に着目してきた。一方で、ペルシア語では、参与者を二つ有し、動作の対象を前置詞が標示するような動詞も少なくない。

たとえば、一般的に起点「～から」のような意味を表すとされる前置詞 *az* は (*az xāne* 「家から」; *xāne* 「家」)、一部の動詞と共起し、動詞の項を構成する。

- (1) *az* *bačče* *defā' kard.*
 PREP 子供 守る.PST.3SG
 「(彼女は) 子供を守った」

(1) のような例は、*az* が前置詞句を構成する際の意味からは想定しにくい用法であるにもかかわらず、どのような動詞でこの前置詞が用いられるのか、明らかにされてこなかった。

加えて、一部の動詞では、*az* と、定の直接目的語マーカ―である後置詞 *rā* が交替する場面があるが、こちらも同様に、交替の要因は明らかにされていない。

- (2) a. *u* *az* *man* *da'vat kard.*
 彼 PREP 私 招待する.PST.3SG
 b. *u* *man* *rā* *da'vat kard.*
 彼 私 POSTP 招待する.PST.3SG
 「彼は私を招待した」

そこで、本研究では、多くの動詞で動作の対象を標示する前置詞 *az* と、典型的な他動詞構文を構成する後置詞 *rā* との交替から、ペルシア語における他動性の表れについて分析する。

2. 先行研究

2.1. 通言語的な他動性研究

ここでは、他動性の関する代表的な研究のうち、Hopper&Thompson (1980) と、角田 (1991) をとりあげる。Hopper&Thompson は、他動性を決定するパラメーターとして、10項目を挙げている。ペルシア語では、このうち、「受影性」「有生性 (個別性の下位分類)」「意志性」が他動性の決定にかかわると考えられる。また、角田 (1991) は、類型論的な観点から、二項述語を他動性にそって7分類に分け、階層として示している。

2.2. ペルシア語の他動性、および後置詞 *rā* の分析

ペルシア語の他動性を分析する際、多くの研究が、後置詞 *rā* により構成される他動詞節を、典型的な他動詞の形式に設定している。この後置詞 *rā* は、他動性や談話機能の観点から分析され、定性、特定性、個別性、話題の標示などの機能が指摘されているが、すべての用例に適用できるような説明は存在しない。

本研究で扱う、前置詞 *az* に対して、多くの先行研究で一致している見解は、この前置詞が、起点、部分と全体などの意味を表す点である (D.C.Phillott 1919, G.Windfuhr 2009, G.Lazard 1989, Anvari&Hasan 2002; 2003; 2004, F.Steingass 1892; 1988, 吉枝 2011; 2017 など)。この前置詞が動作の対象を標示するような例については、辞書・研究書での言及は見られるものの、どのような動詞が前置詞と共に共起するかは明らかにされていない。加えて、伝統的に、前置詞が共起する動詞は自動詞として扱われてきたため、他動性研究の場面でこの前置詞と共に共起する動詞を扱ったものもない。

一方で、近年の研究では、ペルシア語の他動性は、自・他動詞に2分するのではなく、グラデーションをなすものとしてとらえるべきであると指摘するものもある (R.Mahand 2012)。

3. 調査・分析方法

黒柳 (1998)¹から抜き出した *az* と共起する動詞 400 例余りのうち、*az* が起点的な意味で用いられていない、233 動詞を調査対象とした。調査は、インフォーマント調査とコーパス調査の二つの方法をとった。

インフォーマント調査²では、動詞と共に共起する前置詞 *az* が、ほかの設置詞 (後置詞 *rā* やほかの前置詞) に交替できるかどうか、交替する場合、意味に違いがあるか調査した。交替が可能な動詞について、ペルシア語のオンラインニュース (<https://www.hamshahrionline.ir/>) をコーパスとして用い、*az*、*rā* が用いられる文章を収集し、意味の差や出現条件を調査した。

分析にあたっては、Hopper&Thompson (1980) や角田 (1991) の他動性分析の枠組みを採用した。また、先行研究にならい、後置詞 *rā* を、最も典型的な他動詞構文であると仮定し、分析を行っている。

¹ 代表的な、ペルシア語－日本語辞書。

² テヘラン出身の 20 代女性と、50 代女性。

4. 分析

4.1. 前置詞 az が共起する動詞

前置詞 az と共起する動詞は、おおまかに意味から、以下の 17 群に分類できた。

これらの動詞群を、角田（1991）に適用したものが、表 1 である。角田が言及していない動詞群に関して、筆者が適すると判断した階層に分類した。加えて、角田が想定した 7 類よりも、他動性が低いと考えられる動詞を分類するため、第 8 類を立てている。また、az と rā の交替が見られた一部の動詞は、最右列に記載している。

表 1 前置詞 az が共起する動詞と他動性階層（簡略版）

他動性	類	分類（例）	動詞	交替が生じる動詞（群）
高	1	直接影響（叩く）		減らす
	2	知覚（見つける）	—	
	3	追求（探す）	利用する、質問する	従う、招待する
	4	知識（知る）	話す、批判する、視察する	知っている
	5	感情（好き）		心理動詞 ³
	6	関係（似る）		真似る、守る
	7	能力（できる）	—	
低	8	—	奪う、拒否する、禁止する、防止する	移動動詞 ⁴

この表から、まず、az と共起する動詞のうち、動詞「減らす」のような例外を除いたすべてが、階層の第 3 類以降に出現していることが分かる。一方で、ペルシア語学において「典型的な他動詞構文をなす」とされる、後置詞 rā は、他動性が高いものから、低いものまで、かなり幅広く出現していることが分かる。

このうち、rā との交替が生じる動詞には、šokr-gožāri kardan 「感謝する」、etā'at kardan、「従う」、taqlid kardan 「真似する」、da'vat kardan 「招待する」、kam kardan 「減らす」、bālā raftan 「登る」がある。

類似の意味を表す動詞内で、動詞ごとに異なる目的語標示方法を取ったものには、心理動詞、動詞「守る」、動詞「知っている」がある。このうち、「知っている」系の動詞は、交替の対立が、az、rā、dar 「中に」、darba-re-ye 「～について」と多いため、本研究では除外する。

また、az と rā との調査を行う中で、従来後置詞 rā を伴う動詞は、目的語が定でない場合、無標の形になると漠然と思われてきたが、実際には、前置詞を伴う動詞の場合、前置詞/無標/rā での交替は存在せず、前置詞/後置詞での交替のみが生じることが明らかとなった。

4.2. 他動性と目的語標示の関係

インフォーマント調査およびコーパスを用いた用例分析の結果、これらの動詞における az と rā の交替の要因として、大きく「部分」、「意志性」、「目的語の有生性」、「動詞が現れる環境（共起する別の要素）」が

³ ここでの心理動詞には、「恐れる」「楽しむ」「驚く」「好む」「嫌う」「感謝する」などの動詞が含まれる。

⁴ ここでの移動動詞には、「登る」「通る」の二つがある。

考えられた。前者の3つは、Hopper&Thompson (1980) が、他動性に関わる要因としてあげた10項目とも関連があり、az と rā の交替が、通言語的な他動性の原理と類似の尺度で行われていることが分かる。中には、これらの要素が一つの動詞に重複して現れるものもあり、要素のうちの一つが優先されて、目的語標示形式が選択されていた。

4.2.1. 通言語的見解に一致する例

az と rā の交替の要因のうち、通言語的な見解と一致すると考えられるものには、「部分」と、「意志性」の二つがあった。

4.2.1.1. 部分

az と rā の交替の多くは、az が持つ「部分」の意味から生じていると考えられた。「動作が対象に部分的に及ぶ」ときに az が用いられる、という共通点を持つこれらの動詞は、意味を細かく見ていくと、2つのタイプに分類できる。1) 表す事態の差を設置詞による動詞 2) 目的語の意味内容により、設置詞が異なる動詞。

1) 表す事態の差を設置詞によって表す動詞

Dowty (1991) は、ある動作が、「全体解釈」または「部分的解釈」として解釈できるとき、「全体解釈」の場合に典型的な他動詞の形が、「部分的解釈」の場合に、非典型的な形が表れることを指摘している。

動詞「減らす」、「守る」などでは、これらの指摘通り、事態を部分的に解釈する場合に、前置詞 az が用いられていた。表2は、kam kardan 「減らす」、と、「守る」を表す動詞、defā' kardan、hemāyat kardan、hefāzat kardan、mohāfezat kardan、hefz kardan の計6動詞、62例において、az と rā が用いられる場合に、解釈が「部分的か」「全体的か」を分析したものである。

az は「部分的解釈」の時にしか用いられておらず、rā も、ほとんどの場合、「全体解釈」の場合に用いられていることがわかる。

表2 設置詞により表す事態に差をつける動詞の設置詞の内訳

	az	rā	(3)
全体解釈	0	18	a. bād az āludegi-ye havā kam kard. 風 PREP 汚染-EZ 空気 減らす.PST.3SG
部分的解釈	43	1	b. bād āludegi-ye havā rā kam kard. 風 汚染-EZ 空気 POSTP 減らす.PST.3SG
合計	43	19	「風が大気汚染を減少させた」
全合計	62		

(3) は、kam kardan 「減らす」に、az と rā がそれぞれ共起する場合の例である。母語話者によれば、az で標示される(3a)は部分的に大気汚染が減少し、(3b)は、汚染された大気がまるごと飛ばされるという意味になる。動詞「守る」では、守られる対象物の「保存度」が高い場合を全体解釈的、保存度が問われない場合を「部分的解釈」と判断した。

2) 目的語の意味内容により、設置詞が異なる動詞

šokr-goxšri kardan 「感謝する」、taqlid kardan 「真似する」、etā'at kardan 「従う」では、目的語が、「人」

か、「動作など」かにより、az と rā の対立が見られた。これらの動詞では、主に、目的語が「人」の時に az が、「動作など」の場合に rā が用いられる。これは、例えば「人の真似をする」と言う時、実際にはその人の行動や服装など、「その人のある部分」を真似することから、「部分」の意味を持つ az が選択されると考えられる。

表 3 は、šokr-goxšri kardan 「感謝する」 4 例、taqlid kardan 「真似する」 10 例、etā'at kardan 「従う」 11 例の、合計 25 例において、az と rā が標示する目的語の意味内容が「人」である場合と、「もの（具体的な動作など）」である場合の数をまとめたものである。

目的語が「人」で、後置詞 rā が出現する例はみつからず、全ての場合で az を用いていた。また、目的語が具体的な動作などの場合は、後置詞 rā が用いられる傾向にあった。

表 3 目的語の意味内容により異なる設置詞の内訳

	az	rā
人	8	0
もの	3	14
合計	11	14
総数	25	

(4) a. amr-e šomā rā etā'at kard-am.

命令-EZ あなた POSTP 従う.PST.1SG

「(前略；私は) あなたの命令に従いました」

(<https://hamshahrionline.ir/x8kfb>)

b. āfarin az man etā'at ne-mi-kard.

アーフアリーン PREP 私 従う.NEG.IMPF.PST.3SG

「アーフアリーン(人名)は、私に従わなかった」

(<https://hamshahrionline.ir/x8RwZ>)

例文(4)は、etā'at kardan 「従う」の例である。rā を用いる(4a)では、目的語の主要部が amr 「命令」となっており、az を用いる(4b)では、目的語は人そのもの(人名)となっている。

4.2.1.2. 「意志性」により設置詞が使い分けられると考えられるもの

心理動詞では、「恐れる」「驚く」のような動詞では前置詞 az のみが取られるのに対し(「(私は) 犬を恐れる」 az sag mi-tars-am.; sag 「犬」、mi-tars-am 「恐れる」 PRES.1SG)、「感謝する」「好む」など、意志性が高いと考えられる動詞では、後置詞 rā が用いられる(「(私は) 犬が好きだ」 sag rā dust dār-am.; dust dār-am 「好む」 PRES.1SG)。

また、「気に入る」「気に入らない」などでは、非人称構文がとられる(「私はそれが気に入った」 az ān xoš=am āmad.; ān 「それ」、xoš=am 「良いこと」=PRON.ENCL.1SG+āmad 「来る」 PST.3SG→「(私が) 気に入る」)。これは、「気に入る」のような事態の意志性が低いことが原因である可能性がある。

これらのことから、ペルシア語の心理動詞は、その意志性の高さ順に、rā>az>非人称構文、と言う3段階の形式を持っていることが示唆される。

一方で、この「意志性」の有無は、心理動詞以外の動詞では、形式選択にとってあまり重要ではないことを示す例もある。例えば、「見る」のような動詞には、「視界に入る」ことを表す didan と、意思を持って見ることを表す negah kardan の二つがある。そして、意志性が低い didan では後置詞 rā が、意志性が高い negah kardan で前置詞が用いられる。このことから、「意志性」は、心理動詞のような一部の動詞でのみ、形式選択に関わっていると考えられるが、さらなる検討が必要である。

4.2.2. 通言語的見解に反する例；有生性、動詞が現れる環境

通言語的な見解に反する例、または例外として、目的語の有生性と、動詞が現れる環境（共起する別の要素）が、目的語標示の選択要因になっているものがあげられる。

4.2.2.1. 目的語の有生性

Hopper & Thompson (1980) は、目的語に有生性があるとき、その動作は典型的な他動詞構文としてあらわれる傾向にある、としている。しかし、上記表3で扱った、動詞「従う」などでは、むしろ、目的語が人（＝有生）の場合に、非典型的な他動の形である *az* が用いられている。これは、上述のとおり、動作の対象を「部分」的にとらえるためであると考えられる。したがって、ペルシア語では、「有生性の有無」と、「動作の対象が部分的かどうか」という二つの指標が一つの動詞に含まれるとき、有生性よりも、「部分」の観点により重視され他目的語標示の形式をとると言える。

4.2.2.2. 動詞が現れる環境

通言語的な目的語標示の研究では、他動性との関連から目的語標示のバリエーションを説明するものが多い。一方、分析の結果、*da'vat kardan* 「招待する」と、*bāla raftan* 「登る」で、共起する要素によって設置詞が選択されている可能性が示唆された。

da'vat kardan 「招待する」では、「どこに招待するか」を表す、前置詞 *be*（「～に」）による句が共起するとき、必ず後置詞 *rā* が用いられていた。一方、前置詞 *be* が共起しない文章中では、前置詞 *az* が、招する対象を標示していた。また、*bāla raftan* 「登る」では、この動詞が関係節内で用いられる場合に後置詞 *rā* が、そうでない場合に *az* が用いられることが分かった。

5. まとめ

以上のことより、前置詞 *az* が共起する動詞の特徴、および、後置詞 *rā* とこの前置詞の交替の要因について、他動性の観点からは、以下のことが言える。1) 前置詞 *az* が共起する動詞は、参与者を2つもち、他動性が高くはないものがほとんどである。2) 前置詞 *az* と後置詞 *rā* が交替するとき、交替の要因には、「部分」「意志性」「有生性」「動詞の現れる環境」の4点が考えられる。前者三つについて、それぞれ、動作の対象が部分的、意志性が低い、目的語が有生である場合に *az* が用いられる。3) これらの要因が、一つの動詞に対し複数関わり、異なる形式を要求するとき、どちらかの要素が優先される。例えば、目的語の「有生/無生」と、「部分/全体」での解釈が重なる場合、「部分」を標示することが優先され、一般的に典型的な他動詞構文をとる有生物の標示を、*az* が行う。4) 動詞によって、*az* と *rā* の交替の要因は異なる。例えば、「意志性」による交替は、全動詞にみられるものではなく、心理動詞のような動詞でのみ、生じることが示唆された。したがって、ペルシア語では、動詞群ごとに、典型的な他動詞構文を誘発する、もっとも重要な要因が異なると考えられる。

今後は、さらにどういった動詞で、どのような条件のもと、典型的な他動詞構文が表れるのか、さらに幅広い動詞を対象に調査することで、ペルシア語において典型的な他動詞構文が選択される要因を明らかにしていきたい。

〈参考文献〉

〈洋書〉

- Dowty, D. (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67, 547-619.
- Hopper, P. J. & Thompson, S. A. (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56(2), 251-299.
- Lazard, G. (1989) "Le PERSAN", *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden: Dr.Ludwig Reichert Verlag, 1989, 263-293
- Mahand, R.M. (2012) Transitive and intransitive in Persisn. *Journal of Grammar* 2, 169-187.
- 1963: *La Langue Des Plus Anciens Monuments De La Prose Persane*, Paris.
- Phillott, D.C. (1919) *Higher Persian Grammar V2: For The Use of The Calcutta University*, Calcutta.
- Steingass, F. (1892;1988) *Persian-English Dictionary*, St.Edmundsbury Press, London.
- Windfuhr, G (2009) *The Iranian Languages*. Routledge, London & New York.

〈ペルシア語〉

- Anvari&Hasan. (2002) *farhang-e bozorg-e soxan*, 339-340. entešārāt-e irān, tehrān.
- (2003) *farhang-e fešorde-ye soxan*, 120-121. entešārāt-e irān, tehrān.
- (2004) *farhang-e ruz-e soxan*, 56-57. entešārāt-e irān, tehrān.

〈日本語〉

- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版
- 吉枝聡子 (2011) 『ペルシア語文法ハンドブック』 白水社

〈参照 web サイト〉

همشهری آنلاین، سایت خبری روزنامه همشهری | hamshahronline

* 例文は、紙幅の都合上、一部省略している。

〈略号一覧〉

1, 2, 3 :1, 2, 3 人称/EZ:エザーフエ/IMPF:未完了/NEG:否定/POSTP:後置詞/PREP:前置詞/PRES:現在/PST:過去/SG:単数